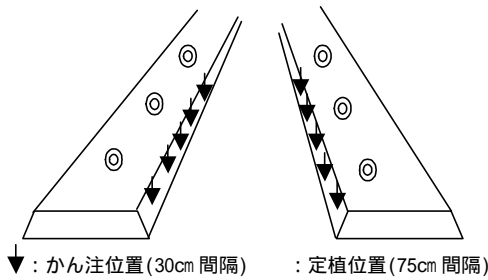


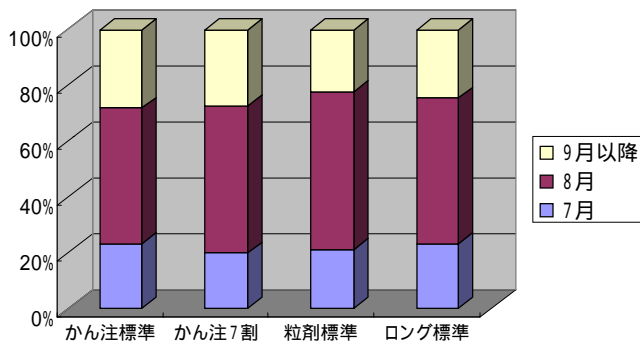
## きゅうり露地普通栽培におけるかん注追肥による草勢維持効果

きゅうり露地普通栽培において、収穫量に応じた量の液肥をかん注追肥することにより、従来の粒状肥料での追肥やロング肥料に比べて9月以降の収量確保ができます。かん注追肥量は、10aあたり800kg収穫することに窒素成分で2.5~3kgとしますが、地力の高いほ場では追肥窒素量を1.8~2.1kg程度にできます。



ペースト状の液肥を原液で畦の肩部に30cm 間隔で施用するかん注機が多く普及しています。(タンク容量 30 L)

図1 かん注施肥の位置とかん注機



かん注施肥を行うことにより、9月以降の収量割合が高くなります。

かん注施肥により、葉柄汁液中硝酸イオン濃度および土壌EC値の変動が小さくなり、栄養的なストレスが少なくなります。

図2 施肥法の違いが時期別収量割合に及ぼす影響(H16)

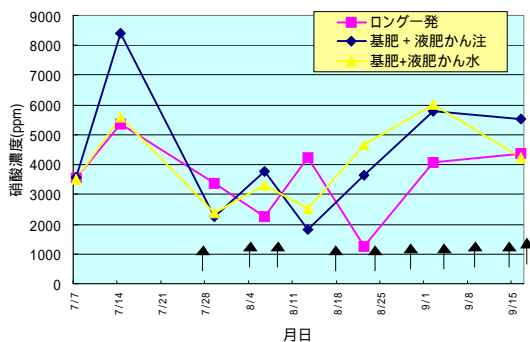


図3 葉柄汁液中硝酸イオン濃度の推移(H15)  
採取部位：高さ140~160cmの開花節位の葉柄

↑ : 追肥実施

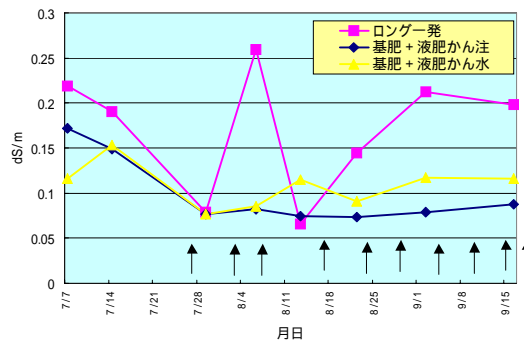


図4 キュウリほ場の土壌ECの推移(H15)  
土壌は株間より採取した